



かいぼりで池の水環境が改善され、ヒメガマやヨシなどの抽水植物が生育するようになった公園があります。抽水植物の茂みは水鳥や水生生物の生息場所になりますが、茂みが拡大しすぎないように抑制することも必要になってきます。野生生物のために抽水植物を管理している大規模なビオトープ池でも、抽水植物の茂みと開放水面を適正に保つことは重要なテーマです。

水鳥のカイツブリは、営巣場所として抽水植物の茂みを利用することから、抽水植物を管理する指標になります。今号では、カイツブリの繁殖を20年以上にわたって維持している都立光が丘公園での知見を中心に、カイツブリが営巣するヒメガマ群生地の管理方法について紹介します。

◆拡大と衰退を繰り返すヒメガマ

水辺に茂るヒメガマは、いつも変わらずそこにあるようにも見えますが、実際にはかなり「動いて」います。ヒメガマは種子による繁殖と、根茎を伸ばすことによる栄養繁殖という2つの繁殖方法を持っています。種子は風や水流に乗って離れたところまで分散し、新天地に根を張ると根茎を縦横に伸ばして群生します。

ヒメガマの群生地は年々、開放水面側へと広がっていき、茂みの中での生育密度も高くなります。過密になると茂みの内部に枯れ葉が目立つようになり、さらに年数が経つと、前年の枯れ草が倒伏しなくなるほど茎が過密になって、群生地が衰退します。

光が丘公園などでの観察では、ヒメガマは5年くらい経つと一度衰退するようです。衰退した群生地は無くなるわけではなく、茎がまばらな状態から再出発します。



▲ 緑鮮やかなヒメガマの若い群生



▲ 年数を経たヒメガマ（植栽マス）。冬でもないのに、枯れている茎が目立ちます

◆カイツブリが営巣しやすいヒメガマとは？

カイツブリはヒメガマの茂みの中で営巣に適した環境を選んで巣を造ります。それは、ヒメガマの茎がまばら過ぎず、過密でもなく、密度がほどよい区域です。根茎が伸びてきてから2～3年経った若い茂みが利用されることが多く、こうした区域は群生地の前縁から2メートルくらい内部に入ったところにあります。あくまでも目安なので、水域の環境条件によっても異なります。

5年くらい経ったヒメガマ群生地は茎が過密で、枯れて倒伏した茎もあり、カイツブリが茂みの内部に入っていくことができません。



▲ヒメガマ群生地の前縁付近は茎がまばらで、カイツブリが活動するスペースがあります

◆ヒメガマを刈ってヒメガマを保つ

河川や大きな湖沼に生育しているヒメガマは、洪水や波浪によって根茎や堆積物が流失することがあり、環境がリセットされることで群生が継続します。一方、こうした自然撈乱のない公園池やビオトープ池では、ヒメガマは過密化したり、堆積物によって陸化していくものです。このような池でヒメガマを保全していくためには、人による適度な撈乱、すなわち刈り取りが必要になります。刈り取りは、年数が経って衰退しそうなヒメガマを生育1年目の状態に若返らせる効果があります。

カイツブリを保全する観点からは、営巣に適した密度のヒメガマが毎年存在していることが重要です。光が丘公園では



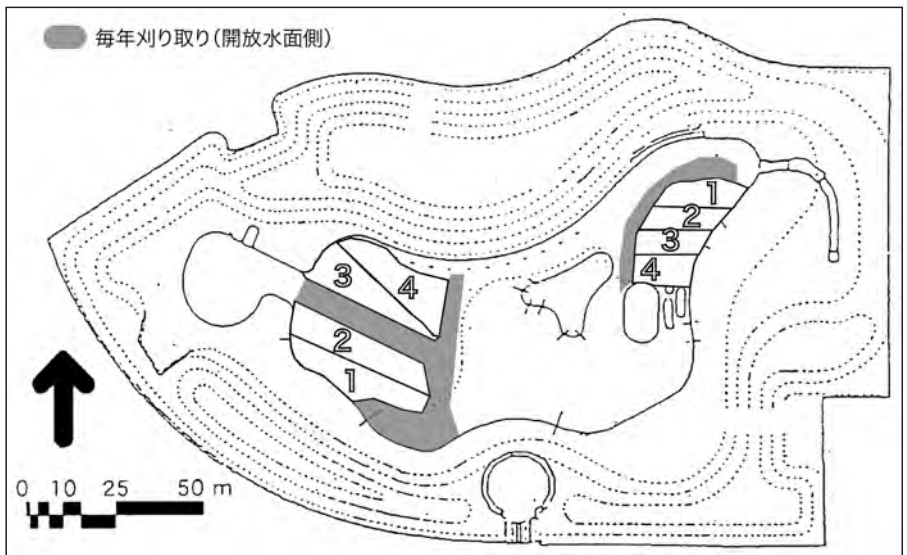
▲典型的な営巣環境。ヒメガマの間にほどよい隙間があります



▲ヒメガマの刈り取り。陸化防止のため、刈った草は池の外へ運び出します

ヒメガマ群生地を4つに区分けし、年に1区画ずつ更新して群生地全体を健全に保っています。こうした管理方法は、当会が管理に携わっているいくつかの池で実践されています。

ところで、ヒメガマの群生は沖側へと拡大していくので、群生の前縁付近には常に茎がまばらな環境が形成されます。それならば過密化した区域を刈らなくてもカイツブリの営巣を保てるかというと、そうはいきません。カイツブリが繁殖するには抽水植物だけではなく、採食や育雛場所になる広い水面も必要です。ヒメガマを刈り取らなければ、いずれは開放水面が減少してしまいます。ヒメガマと開放水面のほどよいバランスを保つために、刈り取りは欠かせません。



▲ 光が丘公園バードサンクチュアリのヒメガマ管理計画図
鳥類などの野生生物の保全区域・観察施設。
ヒメガマ群生地のすべてを東部・西部で各4区画に分け、年1区画ずつ更新しています。開放水面側に分布拡大した部分だけを刈る方法や、観察しやすい区域だけを刈る方法では、刈らない区域の衰退・陸化が進行していきます。



▲ カイツブリの生息環境。繁殖には抽水植物の茂みと開放水面の両方が必要です

◆見る人への配慮も

これまでに述べたように、抽水植物の群生と開放水面の両方を維持するためには、抽水植物の刈り取りが必要です。しかし、こうした知見はあまり知られておらず、野鳥やトンボを観察している人からは、抽水植物を邪魔だから無くそうとしている、生きものへの配慮が足りない、などと誤解されることがよくあります。現地に掲示を行うなどして、刈り取りをする意味や効果についての理解を育てていくことが大切です。

ヒメガマの更新作業

ヒメガマは、さまざまな生きもの
の生息場所になっています。

数年経つと茂みの内部が過密に
なって衰退するので、刈り取って
若返りを図っています。

2024年9月、このあたりを刈り
ました。



カイツブリの巣



チョウトンボ

井の頭かいぼり隊 東京都西部公園緑地事務所

▲ ヒメガマの刈り取り更新地での簡易的な掲示の例。刈り取った翌年には群生地が若返っているのを示すために、日付を記載しています